

ことばでもないことを確かめておく必要がある。たとえば、少なくともこのことばは半世紀ほど前、太平洋戦争前後の公共的な言説の場においても時局にそくして好んで使われていた形跡が残っている。現況をみるまえにその史跡を確認し、関連してこのことばの過去の国語辞書における載録状況と定義の変遷についても整理し、「構想」の社会的構成のはじまりの相を明確にしよう。

### 3・1 二〇世紀半ばの「構想」と辞書定義通覧

—— 構想の社会的構成、その過去を振り返って

#### 3・1・1 二つの「構想」誌

構想ということばは少なくとも大正期ころから一般社会の言論のなかで好んで使われていた様子がかかる。とくに昭和初期から太平洋戦争敗戦の時節にかけては、一つに「大東亜共栄圏構想」が謳われ、東亜新秩序のスローガンのもと大陸侵攻の合理化とその行動原理として機能した。そのA級戦犯が手がけたといわれる構想の周辺とは別に、もう一つ、同時期にはまさに「構想」という名称の思想誌と文芸同人誌が発行されていた。

両誌は昭和一〇年代の異なる時期にどちらも短期間刊行されている。名称だけでなく、あとで述べるように表紙の外観もよく似た両誌なのだが、内容も出版にかかわった関係者も異なる雑誌であった。一方は構想発行所（発売は東京の赤塚書房）のち洗心堂書房から一九三九年（昭和一四年）一月〜四一年（昭和一六年）一二月の三年間に計七冊発行された文芸同人誌である。

一九三九年という時代状況的にはドイツのポーランド侵攻によって第二次大戦の引きがながひかれた年、日本では満州ノモンハンで関東軍の独走があった年である。そこから日独伊三国同盟調印や大政翼賛会の発足などを経て東条内閣が成立、日本の対米開戦が始まる一九四一年一二月までのあいだ、国内外の緊張感が著しく高まっていくその

三年間に発刊された雑誌である。真珠湾奇襲は二月八日であったが、その三日前に発行された号をもって同誌は終刊している。当時、文芸同人誌は当局から強制的な統廃合が迫られていたようだが『構想』最終号には、その道に与せず終刊の道を選んだと記されている。この同人のメンバーのことや同誌の性格、終刊の際の事情などはのちに紅野敏郎(1980)が詳しく記している。その一節を引けば、たとえばつぎのごとくである。

「全七冊あげてことごとく時局迎合の傾向はひとかけらもなし、といってもよい。ここにあるのは、すべて自己内面の凝視、内部のおのずからなる成熟と静謐、闇の中からの透視。そういう点でこの「構想」は、全体としてこの戦中の荒れ狂う季節のなかで、目立たぬが、静かで、勁い精神志向の確かな拠点、広場となり得た。埴谷(雄高)を軸にはいるが、山室静も久保田正文も、また高橋(幸雄)も栗林(種一)も、これを守るべく努め、同人としての責任をわけあったといつてよい。

「構想」は太平洋戦争勃発と同時にうち切るが(二月九日の朝、予防拘禁法で拘引、年末に釈放、拘引された際「構想」も押収され、「不合理ゆえに吾信ず」がシュールリアリズムと刑事より見られ、わけのわからないシュールで共産主義を宣伝しようとしたといつてせめた、と埴谷はのち語っている)、埴谷の戦時下の仕事はなおも執拗につづけられていく」

同誌は一九八四年に言叢社から全号の複製版が関係者の回想記とともに出版されており、文芸同人誌として日本文学史に残る役割を果たした実績が保全されている。なお、戦後一九六〇年代に「構想の會」というところからやはり「構想」という名称の文芸同人誌が少なくとも五号ほど出されている。これは謄写版刷りの手作り同人誌で戦前の「構想」誌とは別物である。

昭和一〇年代に戻れば、当時の思想・オピニオン誌のなかに河出書房から一九三八年(昭和十三年)に創刊された

『知性』があった。この創刊には哲学者の三木清が関わっており、時期的には彼が『構想力の論理』第一にあたる最後の原稿を『思想』誌に出し終えた直後にあたる。この雑誌は太平洋戦争勃発後も刊行されつづけた。だが、サイパン島で日本軍が全滅し、いよいよ時局がただならぬ状態に至った敗戦前年の一九四四年（昭和一九年）九月に『知性』は突然改題し『構想』となる。したがって『知性』誌は第七巻八号まで存在するが、連番を継いだ第七巻九号は『構想』誌に変身している。物資・流通が全面的にままならない状態のなか刊行されつづけた同誌には、ただならぬ言論統制がかかったことは容易に想像がつく。このように誌名そのものが予告なく変わるといふ事態は時局のありようの一端をよく伝えている。一九四四年九月の『知性』誌最終号の編集部による「出版だより」にはつぎのようである。

「来月号より本誌は『構想』と改題し強力な編集内容をもって思想誌として再出発することとなった。したがって、他に差し障りなきかぎり、「知性」の題号は本号をもって終止符を打つわけである。…（中略）…『構想』の未来性にいたってはわれわれに想像も及ばない重責を今より感ずる次第である。「構想」は思想誌として皇国の重大関頭に処する特殊な使命にたち、われわれの全能をよりよき編集に傾けるつもりである」

こうして翌月は『構想』となつて発刊されたわけだが、その編集後記にはこうある。

「本誌は「知性」を改題して思想雑誌として新生の発足を開始したわけである。過去七ケ年にわたる「知性」へのご愛読を深く感謝すると共に、ここに「構想」として面目を新たに、知識青壮年の期待に応えるべくわれわれも決戦の構えで、立ち上がっている。真実、読者の血肉となり皇国の安危の秋に二人力、三人力を発揚しうる指導と激励を果たしたならば、我々の責務もいささかは果たしうることになるのだと思う」

ところで、この思想誌「構想」の内容はどのようなものだったのか。改題創刊号に並んだ論述のタイトルをみると、たとえば、次のごとくである。鬼頭英一による「決戦思想の構想」この著者はフッサールなどの現象学研究者として名高かった哲学者の鬼頭であろう。小林元による「国民総武装の要諦」、中野好夫による「国民指導に希望する」、さらに高倉テルも「日本農業精神」という論述を寄せている。このリベラル思想家として知られる著者の論述が掲載されている事実から、同誌はこの時点にあっても当時ありがちであった軍部によるプロパガンダ誌とは一線を画していたことがわかる。

この河出書房版「構想」は翌年の敗戦直前、昭和二〇年（一九四五年）四月の第八卷三号まで計七冊刊行され終刊を迎える（発行された冊数も先の文芸同人誌「構想」と偶然一致している）<sup>77</sup>。この時点で創刊時に関与した三木清がどの程度かかわっていたかは現在に残っている同誌からはうかがい知ることができない。だが、同年の三月に三木は友人高倉テルをかくまったとして治安維持法違反で検挙され収監、そのまま獄死という運命をたどっている。時期的には「構想」誌の終刊と彼の収監がほとんど一致しているから因果関係が推察できる。

その後、敗戦の混乱期を経てこの雑誌の系譜はおよそ九年後の昭和二九年（一九五四年）八月に河出書房から装いを新たに「知性」第一巻一号として復活をみる<sup>78</sup>。しかし「構想」誌の再登場は果たされなかった。

以上、昭和半ばの未曾有の国内緊張と物資不足、流通・言論統制のさなか、その言論界において二つの異なる「構想」という名の雑誌が、それぞれ七連発火花として打ち上げられたという事実を確認した。この史的事実には「構想」ということが剣に伍すペンという意味でも特殊な力能をもった日本語として機能することをうかがわせる。

### 3・1・2 「構想」の辞書定義通覧

つぎに「構想」ということばの国語辞典での扱いについてみてみよう。まず、明治期（一八〇三七年のあいだ）に

70

か山海とか、人の生死とかいう認識せる事物あるによりて、このとき広大無辺の想像を造りだしたるものなり、くだって英国のセクスピア、支那の金聖嘆、本邦の紫式部のごときは甲のものよりある色相を取り乙のものより他の色相を取り、これに己の才智を加えて、従前未曾有の理相を造りだせるものなり、ゆえに創造の想像は、すなわち自動の想像にして自動の想像の外に別に創造の想像あるにあらざるなり」

図N2は知覚におけるパースペクティブの効果を語る際にしばしば使われる写真である。だが、この写真は他方で現実にはありえない状態やことがらを想像すること、あるいは想像を痛く刺激するといったことは、当たり前にあることがらの配置を少し変えるだけでわけなく生じることを伝えている。この配置替えやその動きをシュルレアリスムではデペイズマン (dépaysement) と呼ぶ。二〇世紀初頭に便器「泉」を匿名でニューヨーク・アンデパンタン展 (salon des artistes indépendants) に展示しようとして無審査のはずの同展で関係者の想像を痛く刺激しその結果、却下されたという出来事があった。その出来事自体が芸術史に一ページを刻むことになって、作品の価値や意義を高めることにつながったデュシャン (M. Duchamp) の既製品によるレディメイド・オブジェ手法 (found art) もその典型である。

その九つの因子とは以下のとおりである。(一) 文化的手段の利用可能性、(二) 文化的刺激に対する開放性、(三) たんにあることではなくて、なることへの強勢、(四) 差別なしに、あらゆる市民が文化のメディアに自由に接近できること、(五) 厳しい抑圧や絶対的な排斥の後の自由、さらにはある程度の差別、(六) 異文化やむしろ対立的な文化の刺激に身をさらすこと、(七) 多様な見方への寛容性、(八) おもだった人たちの相互作用、(九) 誘因と報償の促進。このなかで(五)に納得するなら、矛盾を回避するためにも(二)は「文化的刺激に対する可能的な開放性」、(四)は「あらゆる市民が文化のメディアに自由に接近できる可能性」としてよいはずである。

71

興味深いことには、文芸誌「構想」と思想誌「構想」はジャンルも出版社もまったく異なる雑誌だが、その表紙の意匠は図N3に示すように瓜二つであった。図の左が同人文芸誌「構想」(一九四〇年発行)で右が思想誌「構想」(一九四四年発行)である。発行時期からあきらかだが、後者が前者の装丁をそのまま借用したとしかいえないような酷似である。念のため改題直前の「知性」誌の表紙デザインをみると、図N4のごとくである。だからもともと前身誌の装丁が文芸誌「構想」のそれに



図 N2

戦後の雑誌「知性」は復興と新興に向かう日本の勤労青壮年層を対象にした教養誌といった位置づけで再登場し、社会世相を汲んだ魅力ある記事が盛り込まれた。全国各地には「知性」友の会というサークルができ、一種の社会教育活動の軸にもなった（誌面に並ぶサークル活動の報告記事などをみると雑誌がサーバーとなって情報活動がなされるネットワーク機能が営まれていた様子がよくわかる。それは活動と郵便と雑誌編集発行という現在の電子ネットワークに比較すれば、とてもゆっくりと

と勘違いした）。よく似ていたことがわかる。そうなると、逆にこの装丁スタイルは「知性」のものだった可能性もでてくる。遡ってみると、同人誌「構想」の創刊は一九三九年一〇月。三九年はじめの「知性」の表紙は図N5である。四〇年六月号の表紙において一月號「表記のデザインが漢字の四角囲みになっている（図N6）。翌月にはそれを中央にもってきてその真下に出版社名をおく体裁をとった（図N7）。文芸誌「構想」はこの年の秋に創刊している。この経緯から、文芸誌「構想」がまず創刊にあたり「知性」の表紙デザインを参考にし（事実上、真似）、つぎに四年後、思想誌「構想」が改題にあたって「知性」の装丁を真似た文芸誌「構想」と瓜二つの装丁にしたという真似真似合戦があったようにみえる。もともとこれら三誌にかかわった装丁者が同一人物で、かなりルースに装丁を使い回したという可能性もなきにしもあらずである。本題から外れることだが、あまりにも興味深い一致であったため、あえて触れておいた（実際、これらの雑誌の関係を調べるにあたっては当初、同じ題名、同じ装丁の文芸誌「構想」と思想誌「構想」はすっかり同じ雑誌で、途中休刊したのち時代背景もあって内容を文芸から思想へ大幅に変更したものと勘違いした）。



図 N3



図 N5



図 N4



図 N7



図 N6